

# ピッポ新聞

2003  
2  
No.172

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

# ピッポ

〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

常識の向こうに新鮮な発見  
や驚きがある

子どもであれおとなであれ、本来人間は、自らが何かを発見したり、驚いたりすることにとっても喜びを感じるものです。ところが、多くの人は、歳を増すごとにだんだんその喜びから遠ざかってしまうのではないのでしょうか。

では、何故そうなってしまうのかと言えば、それは、それまでに獲得した既成概念(常識)のなせるワザなのだと思えます。一度得た知識や、物事に対する認識は、なかなか変わるものではありませんし、変えることも難しいものです。ましてや、おとなはその知識や概念をよりどころに生活しているのですから、当然なのかも知れません。



一方、子どもは既知のものは少ないので、多くの事柄に、白紙の状態で接するので、新鮮なおどろきや、発見がたくさんあるのです。これこそが、子どもの特権といえるのかもしれませんが。

もし、おとなが、余り既成概念にとらわれず、物事と接することができるとするならば、その

人の人生はとても豊かだろうな、と想像してしまいます。

世の中には、そんなおとなの人も目を凝らすとあちらこちらにいるのですね。

今月号の「かがくのとも」(3月号)『ぼくのキャベツくん』(津田櫓冬・絵 福音館書店)を書いた、さとうち藍さんもそんな一人ではないかと思いました。この絵本を読んで、ぼくは既成概念にとらわれない、作者の豊かな暮らしの一端が見えたように感じたのです。まずは簡単に内容を紹介しましょう。

シウウくんという男の子が、園芸店からしおれたキャベツの苗を買って、庭に植えます。それが段々大きくなって、収穫されるまでの様子が描かれているのです。これだけだったら、ならん普通の知識絵本とかわることがなく、面白くも何ともないので、この作者の本領はここからなのです。収穫したキャベツの後に、一週間もしないうちに葉が出てきたことに気付いたシウウ君は、それを見守ります。秋になると、そこには小さなキャベツがいくつもできて、それもちゃんと食べられることを知ったのです。そして、冬を越したキャベツは春を迎えると、茎が立ち上がり、クリームがかかった黄色の菜の花が咲き、やがてそれにサヤができて、種が採れました。シウウ君はその種を再び庭に蒔くと、芽が出てきたところで終わるのです。

多くの場合は、キャベツを収穫すれば、畑の残りは引っっこ抜いて、他の物を植えるのが普通です(これがキャベツ栽培の常識なのです)。この本の中でも、お母さんはシウウ君にそう勧

めですが、シユウ君は畑の収穫後のキャベツがまだ元気だからと、それを断りました。だからこそ、そこから出てきた新しい葉っぱを発見し、その後を知ることができたのです。

作者のさとうちさんが、つぎのようなメールで寄せてくれました。

初めて岩手で庭仕事を始めたとき、この絵本の通りのが起きて、私は驚きました。それで会う人ごとに「知ってた？キャベツって二度できるのね」「冬も越すのね？」といったも、誰もただ首をかしげるばかり。農家の人も「そうか？収穫したらすぐに抜いてしまっからわからない」という答えでした。本を調べたら、多年草と書いてある。キャベツが多年草だったなんて（今思うと、菜の花のひとつですからそうなのですが）その当時は考えもませんでした。それで毎年絵本のような状態が続いて、だからやっぱりみんなに伝えたくなくなったのです。キャベツの菜の花は、ほかのアブラナ科の菜の花と違って、そんなに黄色が濃くなく、クリーム色でとつてもきれいです。それを見るためだけでも幾つかをほつておいて見てほしいなと思っております。

さとうちさんは岩手で、植物や、昆虫・動物が共存できるような庭作りを楽しんでいます。この絵本の中でも、キャベツにモンシロチョウが卵を産んでアオムシが発

生するところがあります。シユウ君がアオムシをとらえて、近くの菜の花に移す場面がさりげなく描かれています。作者のさとうちさんには、アオムシはキャベツの害虫だから駆除しようなどという、考えは全くありません。それよりも、アオムシが、たくさんのモンシロチョウになつて庭を飛んだら楽しいなと考えるのです。こういう姿勢こそが、発見や驚きにつながるのだと思います。

あたかも子ども目線で物事を見る謙虚な姿勢が、新鮮な驚きや疑問を生み出すのですが、これはこの作者の資質だと思います。勿論、大人であるさとうちさんは、また、物書きとしても、疑問に対して調べ上げ、専門家以上の知識を自分のものとし、しかし、失わないのは、いつも自分の中に広いキャパシティをもっていて、既成概念にとらわれないことです。その姿勢が、おもしろいながく絵本を生むのだと思います。なお、さとうちさんが連載している雑誌「サライー徒然庭仕事」（小学館）の今号（2月20日号）「菜の花特集」の記事のなかに、キャベツの花の写真が掲載されています。興味のある方はご覧下さい。ピッコには「かがくのとも3月号はたくさん用意してあります。」

## ねーこの本読んだ？

『やねうらべやのおにんぎょうさん』（やぎゆうまちこ・作 1365円 福音館書

店）



屋根裏部屋に、忘れ去られたお人形が埃をかぶっていました。お人形は自分の名前も忘れてしまっていたのですが、そこへ、野ネズミがやってきて、

少しずつ思い出していったのです。そして、ある日女の子が人形を発見して……。

『どうして力はみみのそばでぶんぶんいいうの？』（ヴァルナ・アールデマ・文レオ・&ダイアン・ディロン・絵 やぎたよしこ・訳 1890円 ほるぷ出版）



「風が吹けば桶屋が儲かる」式の奇想天外なお話。はじめは、力のちよつとした「ウソ」をきらったイグワナが、耳を枝

で塞いだことだった。そこから、動物たちが次々に反応し、フクロウの赤ちゃんが死んでしまった。悲しんだかあさんフクロウが太陽を目覚めさせることを拒否、森は夜が続いた。そこで、森の王様ライオンが……。

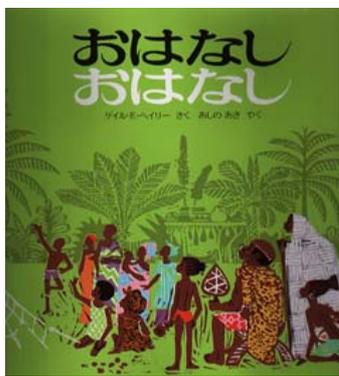
復刊絵本

『ヘルガの持参金 トロールの愛の物』  
 (トミー・デ・パオラ・作 ゆあさふみえ・  
 訳 1575 円 ほるぷ出版)



ヘルガは美しいけれど、とても貧乏なト  
 ロールです。結  
 婚を申し込まれ  
 たけれど、持参  
 金がないので結  
 婚できません。  
 そこで、考えて、  
 人間の所へ持参  
 金を使つて持参  
 金を稼ぎに出かけます。魔法を使つて持参  
 金はたまたつたけれど・・・復刊絵本

『おはなし おはなし』(ゲイル・F・ヘ  
 イリー・作 あしのあき・訳 1890 円  
 ほるぷ出版)  
 「むかし・むかしー お話はせかい中  
 どこにも、ひ  
 とつもなかつ  
 た・・・そ  
 れは空の王者  
 ニヤメが箱の  
 中に全部しま  
 いこんでいた  
 からだそうだ。  
 それをニヤメ



からアナONSEという男が雲の糸でハシゴを  
 作り、空にをかけて買い取るといふアフリ  
 カの民話をもとにした版画の絵本。1997  
 年のコールデコット賞受賞作。復刊絵  
 本

『オリンピックのころの東京』(河本三郎・  
 文 春日昌昭・写真 1785 円 岩波書  
 店)



1964 年(昭和39年)の10月に東京オ  
 リンピックが開催された。オリンピックは  
 あまり覚えていないが、この年の4月、ぼ  
 くは東京生活の第一歩を踏み出したのだ。  
 このフォト絵本を開いて、10ページの左上  
 の写真を見たときに、37年前が蘇つてき  
 た。この東中野駅のホームから見える風景  
 こそは、ぼくが当時毎日見ていたものだか  
 らである。その頃は、この駅から歩いて15  
 分ほどの所に部屋を借りていた。物置を改  
 造したような  
 四畳半一間、  
 壁はベニヤ板  
 で仕切られた  
 だけ、トイレ  
 水道は共同・  
 風呂無しで家  
 賃が5千円だつ  
 た。家からの  
 仕送りが1万  
 円だったっけかな? 観光バスの洗車、ラッ  
 シュアワー時のホームの整理員、甘栗売り、  
 家庭教師、何てバイトもやったけ・・・。  
 この本は岩波フォト絵本というシリーズの  
 1冊これまでに、「フクロウを撮る 農業  
 青年の観察苦闘記」(滝沢信和・文写真  
 今泉吉晴・解説)、「チンドンひとすじ70年」  
 (菊乃家メ丸・語り 栗原達男・写真 神  
 崎宣武・解説)、「わたしの呼び名は『まあ  
 もちゃん』」(森山眞弓・文写真)、「ガジユ

マルの木の下で 26 人の子どもと美和母さ  
 ん」(名取美和・文 奥野安彦・写真)の  
 5冊が既刊 定価は各1785円



『神の守り人 来訪編』『神の守り人 帰  
 還編』(上橋菜穂子・文 二木真希子・絵  
 各1575 円 偕成社)  
 絶対的な力を持つ神を自分中に呼び込む  
 ことで、周り  
 の人を瞬時に  
 かみ殺してし  
 まうことが出  
 きるアスラで  
 あるが、また  
 一方で、  
 12歳のひ弱

で内気な女の子でもある。兄とともに周り  
 に翻弄される姿を見て、女用心棒バルサと、  
 おさななじみのタンダは二人の兄妹を助け  
 る。アスラの力を利用しようとするシハナ  
 たちと戦い、アスラが絶対的力を行使する  
 快感を断ち切り、人間として生きる事をう  
 ながすのだが・・・。これを読みながら、  
 現在その圧倒的な力を背景に、世界に君臨  
 しているがごときに振る舞うアメリカのブツ  
 シュ政権のことが頭をよぎったのは何故だ  
 ろうか? 守り人シリーズ最新刊

『気球にのつた少年 大あばれ山賊小太  
 郎』(那須正幹・文 小松良佳・絵 12  
 60 円 偕成社)  
 子どもばかりの山賊たちのところへ、気

球に乗ってやってきた、洋行帰りの次郎丸



という新しい仲間が加わった。山賊たちは次郎丸の知識と指導で、火薬や大砲まで作ってしま

うのである。それは、そもそも身勝手な戦いで子どもたちの親を奪い去った侍たちと戦うためであるのだが……。子どもたちが、自分たちの知恵と団結で、悪い大人をやっつける痛快な物語。これは、前作『大あばれ山賊小太郎』の2作目。続けて3作目『八雲国の大合戦』も近く刊行予定。

## インフォメーション

ご希望の方に進呈します

その一

倉庫を整理していたら、1995年の岩波の「図書6月号」が少部数出てきました。「岩波少年文庫創刊45年特集」が掲載されています。石井桃子さんの「岩波少年文庫と私」というインタビュー記事を中心に、黒柳徹子・落合恵子・日高敏隆などの人が文を寄せています。

その二

これも倉庫から出てきたものですが、福音館の絵本ポスター(5点各3枚)。「しろいうさぎくろいうさぎ」「きんぎょがにげた」「林明子さん」「サンタさんからきたてがみ」「そらいろのたね・ぐりとぐら」

ご希望の方はピッポまでお出てください。

(無くなった時点でお終いです)

ばあやのお話かご

2月22日(土)午後2時からピッポで

先月はこちらの都合でお休みだったのですが、連絡が徹底せず一部の方に集まっていたさすみませんでした。今月は宮崎さんも来店します。どうぞお楽しみに。

木城えほんの郷から4冊のアジアの絵本が復刊されました。

『ヒマラヤのふえ』

(ラマチャンドラ・作 木島始・訳 1575円)

これは、1976年に福音館から出版され1983年に絶版になっていました。

『まるのうた』

(ラマチャンドラ・作 谷川俊太郎・訳 945円)

1975年福音館から出版され、1981年に絶版になっていました。

『にげだしたひげ』

(シビル・ウエッタシンハ・作 野口忠司・訳 1

260円) 1988年に福武書店から出版されま

したが、絶版になっていました。

『ちようちんまつり』

(唐亜明・文 徐楽楽・絵 1575円)

1994年に福音館から出版され、1999年絶版になっていました。

上記4点注文賜ります。

福音館からの復刊4点も入荷!

『まりちゃんとおおあめ』(フランソワーズ・作 きじまはじめ・訳 150円)

『ひよこのかずはかぞえるな』(イングリット&エドガー・ドーレア・作 せたていじ・訳 1260円)

『すばらしいとき』(ロバート・マックロスキー・作 わたなべしげお・訳 1575円)

『七わのからすーグリム童話』(フェリクス・ホフマン・絵 せたていじ・訳 1365円)

演劇のご案内 (しずおか演劇祭実験劇場)

『借宿橋物語 ゆめの乱』

三月二十一日(金)二十一日(土)

前売り1800円(高校生以下前売り1500円)チケットとチラシはピッポにあります

### 編集後記

先月号の山小屋のピアノについて知人から電話をいただき、どうやってピアノを運んだかが判明しました。やはり、下から担いで運ぶのだそうです。これができて、小屋では一人前として認められのだから。すごいね!